



さくひめの果実

近年のハウスモモ栽培では、温暖化の進行で冬の気温が高く、休眠から覚醒するために必要な低

ハウス栽培モモ「さくひめ」

収穫時の果実重が
大きいほど高糖度

現場で使える！研究成果

温が不足し、開花が不順になりやすいことが問題となっている。
農研機構がブラジルから導入した「Cora 1」と日本の早生品種「ちよひめ」などを交配して育成した早生モモ「さくひめ」は、少ない低温でも休眠から覚醒し、暖冬年でも正常に開

花するため、安定して生産できる暖地向けの品種として期待されており、本県のモモ産地においても導入が進んでいる。そこで、無加温ハウス栽培

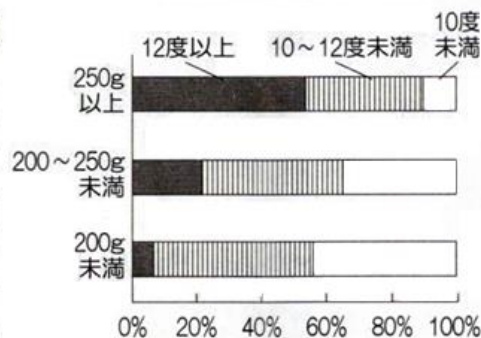


図 さくひめの果実重と糖度の関係（無加温栽培、2017年～19年）

におけるさくひめの収穫時の果実重と糖度の関係について調査した。

その結果、収穫時の果実重が大きいほど糖度が高い傾向にあり、糖度12度以上の高糖度果実の割合は、果実重250g以上では6割程度、200g～250g未満では2割程度、200g未満では1割以下となった。さらに、果実重200g未満では10度未満の低糖度果実の割合が高くなることがわかった。

高糖度のさくひめを生産するためには、果実重250g以上が必要であり、適正な着果量と摘果・摘果管理により大果生産をめざすとよい。

（長崎県農林技術開発センター 果樹・茶研究部門 川良将一朗）